

死んだ王妃は

二度目の人生を楽しみます3

お飾りの王妃は必要ないのでしょう？

レティシア

宰相・ジェラルドの妻。
騎士のグレインとも
親交が深い。

リーシア

帝国魔法学園の
学園長・マルナスの次女。
盲目の小説家。

カーティア

元・グラナートの王妃であり、
現・アイゼン帝国の皇后。
病死の後、時を遡って運命を乗りこえ、
シルウィオと結ばれた。

シルウィオ

アイゼン帝国の皇帝。
カーティアに出会って
愛を知り、今では
子煩悩な父親に。

テア

皇帝家の長男。
剣術の才がある。

イヴァ

皇帝家の甘えん坊の
末っ子。

シュルク

大国カルセインの王子。
時を巻き戻す魔法の影響で
身体が弱っている。

ヒルダ

元・グラナートの側妃。
世界を巻き込む戦を
引き起こそうとした罪で
処刑されたはずが――？

リルレット

カーティアとシルウィオの愛娘。
魔法の才がある。

CHARACTERS

登場人物紹介

プロローグ

「レイラ……君との婚約を破棄させてもらう！」

アイゼン帝国の城で開かれた、荘厳な舞踏会。

貴族たちが集まるその場に声が響き、周囲の視線が叫んだ人物へと注がれる。

会場の一角にいた私——カーティアは、その光景を見て、ため息を吐いた。

「あちゃあ……グレイン、片付けの手配をしておいてね」

「はは、承知いたしました」

私の護衛騎士であるグレインは、短く切り揃えられた茶髪に触れて苦笑いした。

端正な顔立ちの彼はそんな何気ない仕草でさえ、周囲の令嬢の目を引く。

だけど私と彼は、これから起こるであろう顛末を予想して気が重かった。

「……なにを言っているの。ベルモンド」

「俺は真実の愛を見つけたのだ！ 君ではなく……このリンダと婚約を結ぶ！」

意気揚々と真実の愛だなんて齒の浮きそうな台詞を吐くのは、このアイゼン帝国の公爵家の令息

であるベルモンドだ。

彼に婚約破棄を告げられているのが、伯爵令嬢のレイラ。

そしてベルモンドが腰を抱いている女性は……なんて、説明はもういいだろう。どうせすぐ終わるだろうから。

ベルモンドは婚約者のレイラに見せつけるように、寄り添う女性に口付けをする。

「君のような冷たい女性より、俺はリンダのような愛に溢れた女性と一生を添い遂げたい」

「私は……婚約者というだけでなく、貴方の事業にも手を貸してきました。全ては我が家へ融資して頂く約束のため……それを反故にするのですか？」

レイラは悲しみを殺して、冷静に対応していた。大国である帝国貴族としての矜持を持っているのだと窺える。

対して、婚約破棄を宣言したベルモンドと言えば、下品な笑い声を上げる。

「公爵家は君の家への融資を無駄と判断したただけだ。訳の分からぬ物を作り、その融資を望むなど馬鹿げている」

「あれは……この国を変えるはずで……」

「もういいだろう。恨むのなら、馬鹿げた物作りに熱中している父親を恨むといい」

「支えてきた私にこの扱いですか。もう……いいです」

レイラが悔し涙を流しながらその場を去っていく姿を、ベルモンドはなおも嘲笑っている。おっと……そうこうしている内に彼が来たみたいだから、この醜い茶番劇はもう終わりだ。

「あはは！ 無様ね！ もう社交界中の皆が聞いたんだから、婚約破棄は成立よ」

「リンダの言う通りだ。皆にも宣言しよう！ この日をもって俺は婚約破棄を——」

「おい、黙れ」

「え……ぶっ!？」

突如として、ベルモンドの顔が強い衝撃によって大きく歪む。

葡萄酒の酒瓶を顔面に投げつけられたのだ。鈍い音がして、彼は痛みに悶えた。

「つ……だ、誰だ!？」

「黙れと言っている。お前、どこで騒いでいるか理解しているか」

「俺が公爵家の者だと知っての狼藉か！ え……あ、ああ」

視線を上げたベルモンドは、一瞬にして血の気を失っていく。

当然だ、なにせ彼の前に現れたのは……

「へ……陛下!？」

「誰だ、貴様」

銀糸の髪が会場の光に照らされて一層輝き、冷たい顔立ちは無表情だからこそ美しさが際立つ。

炎を映す紅蓮の瞳には似つかわしくないほど、彼の視線は凍てつくようで、周囲は静まり返った。

ベルモンドの前に現れたのは、このアイゼン帝国を治める皇帝シルウィオ・アイゼン。

いつもは社交界に現れない皇帝の姿を目の当たりにして、ベルモンドは戦々恐々といった様子だ。

「ど、どうして……こ、今夜も陛下は不参加だ」と

「黙れ、発言は許可していない」

シルウィオは後方に控えていた男性——宰相のジェラルド様になにやら小声で話す。

ジェラルド様は大きな体躯を持っているので一見怖そうだが、いつもは柔らかな表情を浮かべている。しかし今は、皇帝と話しながらも、瞳は睨むようにベルモンドを射貫いている。「余計な口答えはせずに消えろ」と目で告げていた。

なのにベルモンドときたら、無視されている状況に耐えられなかったのか、口を開いた。

「あ、あの！ 今は俺が婚約破棄を皆に宣言しているのです！」

「……は？」

「公爵家として、俺が結婚する相手は周知せねばなりません。いつまでも伯爵家のレイラと婚約をしていると思われる訳にはいきませんからね。だから、この場を借り——」

「それを、俺が許可したか？」

はい、という訳で、ついにシルウィオの堪忍袋の緒が切れたみたい。

シルウィオはベルモンドの首を掴み上げ、その指が首に食い込む深さがベルモンドが味わっている痛みを物語っている。

「婚約破棄だど？ 今夜の舞踏会は貴族同士の交流のために城を皆に提供している。それを勝手にお前の宣言に利用することを俺が許したか？」

「つが……あぐっ!？」

「この会は代々続く伝統によって開かれる誇り高き場だ。お前がそれを乱したこと、我が帝国への愚弄に等しい行為だと理解できないか？」

「ち、ちが……」

シルウィオはそのまま大きく振りかぶって、ベルモンドを放り投げた。

投げた先は……先ほどまでベルモンドと笑っていた浮気相手のリンダだった。

「え！ ちよっ!? いや!!」

「おぐっ!?」

鈍い音が鳴り響き、周囲の机を巻き込んで壁まで叩きつけられた二人は動かない。

鼻血を流し、貴族らしかぬ無様な姿となって気絶していた。

投げたシルウィオは、見守っていた帝国騎士へと視線を向けた。

「直にあの子たちがくる、綺麗に片付けろ。それと……そいつらには後に処罰を下す」

「二はっ!」

指示を受けた帝国騎士たちは、驚く速さで会場を片付けていく。

私の指示でグレインがあらかじめ人を集めていたので、片付けはすぐに終わった。

周囲の貴族が呆気にとられているのを意に介さず、シルウィオは会場の扉を見つめている。

そしてそんな彼に、ジェラルド様とある機械を渡していた。

撮影機と呼ばれるそれは、つい最近ある帝国貴族が開発した物だ。魔力を込める事により、風景を記録して写真という絵にする画期的な装置である。

撮影機を手には、二人は先ほどの騒ぎは嘘のように小声で話し合っていた。

「ジェラルド、どこを押せばいい」

「た……確か、ここかと」

「本当か？」

「も、申し訳ありません。なにせこういった複雑な物は苦手で」

「……おい、そこのお前」

周囲を見渡したシルウィオは、婚約破棄されたレイラへと声をかける。ベルモンドの前を去った彼女だったが、シルウィオが現れたのでまだ会場内に残っていたのだ。

撮影機のことを聞くなら、彼女が適任だ。なにせこの機械を開発したのは、彼女とその父なのだから。

役に立たないがらくた——そうベルモンドから馬鹿にされながらも苦勞して仕上げた品だそうだ。開発した装置を帝国へ献上したとはいえ、まさかもう皇帝シルウィオが持っているとは知らなかったのか、レイラは驚きを隠せない様子だった。

「レイラといったか」

「は！ はい！」

「どう使う？」

「え……えっと、こちらのレンズを対象に向けて、ここを押してくださいれば……」
「なるほど」

レイラの説明をジェラルド様はメモにとり、シルウィオは真剣に聞いた。

説明が終わると、シルウィオは手の中の撮影機を会場の扉へ向ける。

「感謝する。これで記録を残せる」

「い、いえ！ し……しかし、一機で撮れるのは百枚までです。高価な品ですので、枚数にご注意のうえ使ってください」

「分かっている」

シルウィオとレイラがそんな会話を交わしていた時、グレインがそっと私の肩を叩いた。

「カーティア様、お二人の準備が整ったのですが……お母様とご一緒にいいそうです」

「ふふ、まだ甘えん坊ね。分かった、すぐに向かうわ」

シルウィオが機械の扱いに四苦八苦している間に、私は別の扉から会場を出る。

そして入場口になっている大扉の前へと回り込むと、小さな子供たちが駆け寄って来た。

「お母様！ ごめんなさい！ テアと二人で良いって言ったのに、やっぱり怖くなって」

「おかさま、抱っこして」

抱きついてきた少女はリルレット。私の娘で、可愛い長女だ。金色の髪に、父親譲りの紅の瞳が爛々^{らんらん}と輝き、まだ七歳ながらも女性らしい可憐さがある。

そしてその後ろから、甘えるように手を伸ばしてくるのはテア。私の息子であり、銀色の髪に紅の瞳は、シルウィオ瓜二つ。とっても甘えん坊で可愛い四歳の男の子だ。

「いいのよリルレット、一緒に行こうね。ほら、テアも。皆の前だから手を繋いで行こう」

今日はテアが初めて社交界に出る日でもあり、そのお祝いで、珍しく家族総出で参加する。

私は着飾ったリルレットの手を握り、もう片方の手でテアの小さな手もギュッと握る。

「カーティア様、どうぞ」

私たちの準備が整ったのを確認したグレインが、会場へと入る大扉を開いた。

貴族たちが拍手で迎える中で、シルウィオは撮影機を手にしてこちらを見つめている。無表情だけど、私たちには父である彼が喜んでいるのが分かった。

他の人もすぐに分かるだろう。なぜなら、パシヤツという軽快な音が鳴り響いたから。

撮影機で撮影したのだろうと、周囲は父親らしい姿を微笑ましいと思っていた。

でも……その微笑ましい時間は一瞬で終わった。

パシヤ、パシヤパシヤ！

「え……？」

パシヤパシヤパシヤパシヤ！

「へ、陛下？」

パシヤパシヤパシヤパシヤパシヤパシヤパシヤ！！

「と……撮りすぎ……」

パシヤツ！！

「ジェラルド、替えを」

「はっ！！」

「あ……あの」

そんなやり取りを交わしている三人を見て、私は苦笑しつつ、子供たちへ知らせる。

「ほら、お父様はあつちだよ」

シルウィオに気付いた子供たちが、喜びの笑みを浮かべた時——撮影音は加速した。

パシャッ！ パシャパシャパシャパシャパシャパシャパシャパシャ！！

「陛下！」

パシャパシャパシャパシャパシャパシャパシャパシャ！！

「それは高価な物で……」

パシャパシャパシャパシャパシャパシャパシャパシャ！！

「あの……」

「よし、可愛さを逃さず撮れた」

「見事です、ね、陛下」

「あ……あの……」

満足したシルウィオは、撮影機をジェラルド様へと渡す。そして困惑している、開発者の娘であるレイラへと視線を向けた。

「増産しろ、資金の援助はする。これは……帝国をより豊かにするはずだ」

「え……あ、ありがとうございます！」

シルウィオったら、帝国を豊かにする発明品なのは本当だろうけど、きつと家族の写真が残せるのが嬉しくて即決したわね。

なんにせよ、婚約破棄されたはずのレイラにもはや悲壮感はなく、むしろ苦勞が報われたという

喜びを溢れさせて、感謝を告げるようにシルウィオに深々と頭を下げていた。

きつと他の貴族も撮影機に興味を示すでしょうね。その火付け役となったシルウィオは、なにも知らずに私たちの元にやってくる。

「お父様！」

「来い、リル」

シルウィオは駆け寄ってきたリルレットを抱き上げ、遅れて歩いてきたテアも軽々抱っこする。

「おとさま！ テア、はじめてのしゃょうかいだよ」

「頑張ったな、テア」

「うん。おかさまがいつしよだったから！」

「いい子だ」

「あー！ リルもいい子して！」

二人の子を抱き上げるシルウィオの姿に、先ほどまでのような威圧感はない。

そしてなにより、私に視線を向ける彼は無表情を笑みに変えてくれた。

「ありがとうね、シルウィオ」

「いい。カティのためだ」

かつての私は、別の国であるグラナート王国の王妃だった。

そこで冷遇された末に病気で死んでしまった私は、あるキツカケで二度目の人生を歩む事ができた。

巡ってきた運を、無駄にしない。

どうせ死ぬ命ならと、二度目の人生を自由に生きると私は決めた。

そんな時にシルウィオと出会い、お飾りの皇后として私は彼と結婚した。

いつも無表情で鉄のようだった彼が、今はこうして笑顔で私に語りかけてくれる。

そう、私は二度目の人生で愛する家族との日々を満喫していた。



その日の夜、寝室のソファに腰掛けたシルウィオと私は、身を寄せて写真を見つめていた。

「……良く撮れてますね」

「俺の腕がいい」

「ふふ、そうかも」

見つめ合うと、シルウィオは照れたように視線を逸らす。

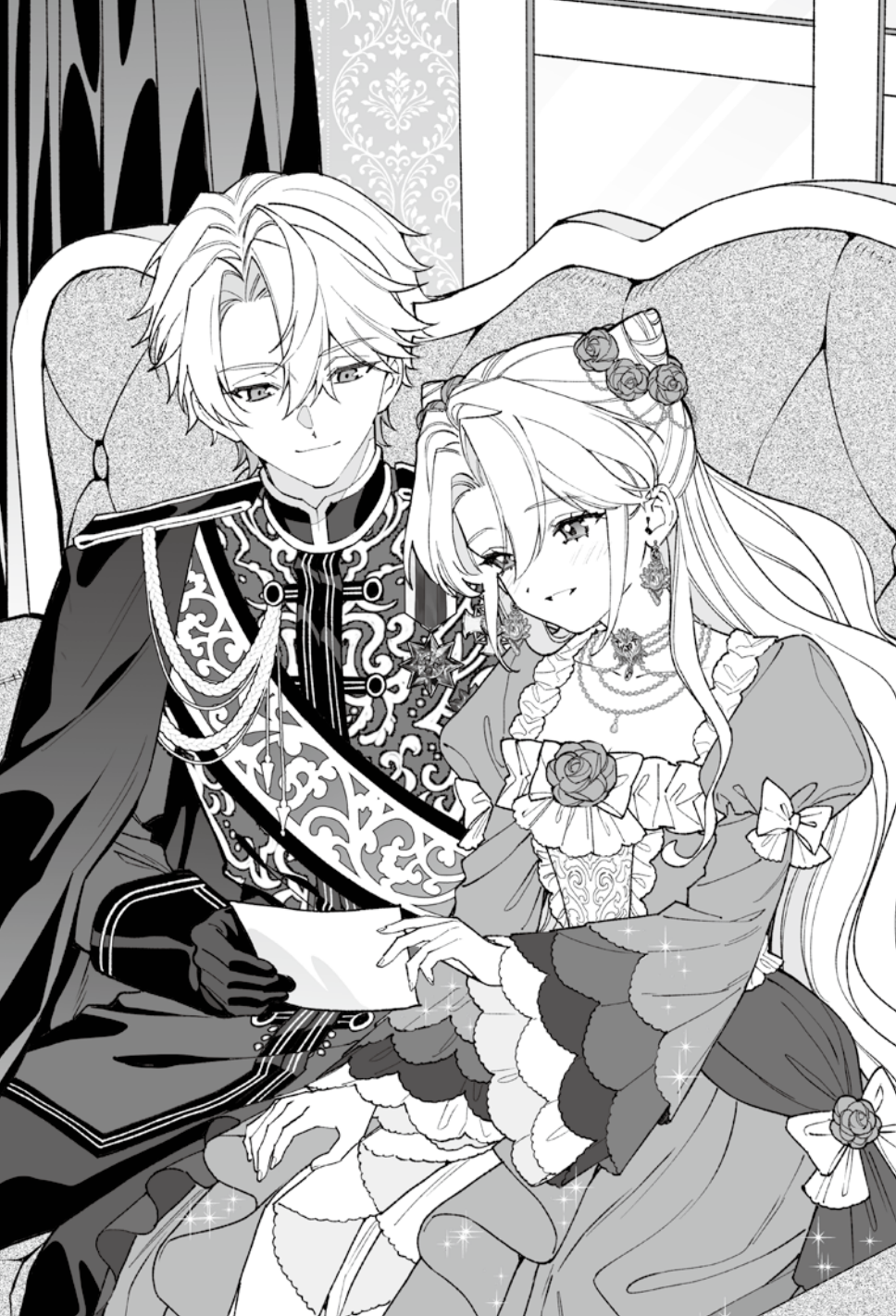
「いつも、ありがとう。シルウィオ……いくらお礼しても足りないよ」

「礼はいい」

シルウィオは、私の首筋へと手を回し……そっと口付けを交わす。

「これで、充分だ。カティ」

「……大好き」



「俺もだ。愛してる」

子供たちが寝静まった後の、夫との甘いひと時。

この二度目の人生を大切にしたいと願いながら、私は今日も幸せを噛み締めた。

第一章 戻りつつ、進みつつ

「コケエエ！」

庭園を元気に走り回っているのは、私の家族の鶏、コッコちゃんだ。

「コッコちゃん、おいで」

私が声をかけると、「コッコ」と、抱っこしているテアも手を伸ばした。

「コッケ！」

コッコちゃんは、呼びかけに答えてくれるように私たちに飛びついた。

「コッコ、かわいいーね」

「可愛いね、テア」

いつものように庭園でテアと過ごしながら、コッコちゃんと戯れる——そんな変わらぬ安寧の日々が変化したのは、突然だった。

「カーティア様、お寛ぎ中に失礼します。お手紙が届いております」

宰相のジェラルドが深々と礼をしつつ、私へと一枚の便せんを手渡す。

手紙なんて珍しい、いったい誰からだろうと思って差出人を見て、ギョツとした。

「こ、これ！ カルセイン王国の……シュルク殿下からですよ！」

「そのよう……ですな」

私が驚き、ジェラルド様も困惑しているのは当然だった。

カルセイン王国といえば、このアイゼン帝国に並ぶ大国の一つ。魔法に秀でた者が多く集う、世界随一の魔法国家だ。

かつて二国は争いの過去もあった。今は安定しているが、国家間の心の距離は遠い。

とはいえ、もちろんシュルク殿下とは親交もあるし、知らない仲ではない。

なにせ時間を戻す魔法を使ったのはシュルク殿下であり、その代償として寿命を大きく縮めた彼を救うため、リルレットが今も頑張っているのだ。

「いきなり私宛に手紙だなんて……シュルク殿下から緊急の言伝かもしれないわね」

「ええ、そのため至急の届けにまいりました」

どうやらジェラルド様も事が重大かもしれないと危惧しているようだ。

私もドキドキしつつ、手を伸ばしてくるテアをかわしながら手紙を読む。

『拝啓カーティア様。この度は突然の手紙で申し訳ない。ただどうしても至急お伝えしなくてはと思い、こうして手紙を送らせてもらいました』

仰々しい書き出しに警戒しつつ、続きを読み進める。

『実は貴方の娘のリルレット姫と文通をしています、彼女はとても面白く、興味深い魔法を開発したようだ』

「え……魔法？」

『それを……すまない！ 僕は面白がって試すべきだと提言してしまった。もしリルレット姫が興味を引かれてその魔法を使ったら、色々ややこしくて面白い事になってしまうかもしれない。だから先に謝っておこうと思ってるね』

な、な……!? 脅かすような文面だと思えば、後半はいつもの茶目っ気に溢れた文章だ。

これはシュルク殿下が私をからかって送ってきたのだとすぐに分かった。

それをジェラルド様に伝えれば、彼も一安心したように息を吐く。

「そ、そうであれば安心です。しかしリルレット姫が魔法とは……いったい？」

ジェラルド様が首を傾げた、その時だった。

「お母様！ お母様!!」

「っ？ リルレット？」

リルレットが庭園へと駆けてきて、私に抱きついた。いつもよりもニコニコとしていて、なにやらご機嫌な様子だけど、同時に嫌な予感もした。

「どうしたの？ リルレット」

「リルね、すごい魔法を考えたの！」

魔法の才能に長^たけているリルレットが魔法を生み出すのは、これが最初ではない。

今までにもいくつか、大なり小なり魔法を生み出しているのだけ……

なぜか今日は、今までにないくらい、かなりの上機嫌だ。

「どんな魔法なの？」

「内緒！ でもね、お父様が自分に魔法をかけてもいいって言ってくれたの」

「え？」

リルレットはニコニコとして、言葉を続けた。

「お父様がいいって言ってくれたから試したらね！ 大成功したんだよ！」

娘の言葉を聞いても、どういう状況か読めない。

戸惑う私を見て、リルレットはニヤリと笑ってテアの手を引いた。

「ふふ。リルの知らないお父様が見られて嬉しかったなあ……リルがテアとおるすばんしておくから、お母様もお父様に会いに行つてあげて」

「なにを言ってる……？」

「会いに行つたら分かるよ！ シュルクさんに結果を送りたいから、いっぱいお話しして、後でなにがあったか聞かせてね。お父様は執務室にいるから！」

「ねえねといっしょ？」

「そう！ いっぱい遊ぼう！ テア」

リルレットは結局明確な答えをくれず、テアと一緒に庭園を駆けていってしまった。

私とジェラルド様は互いに視線を合わせて、同時に首を傾げる。

「な、なにか起こっていきそうですよ」

「はい。宰相としては頭を抱えてしまいそうな問題が起きている予感がします」
娘にはぐらかされた答えを求めるべく、私はシルウィオの元へと向かった。
執務室の扉をノックして、彼の反応を待つ。

「シルウィオ？ 入ってもいい？」

「……入れ」

いつもと変わらない声だが、しかしなにかが違うようにも感じた。

違和感を抱きながら扉を開くと、常と同じ様子のシルウィオが座っていた。

「えっと……リルレットから聞いたんだけど、魔法の実験を……」

「リルレットとは、先の子か？」

「え……そうだよ？ どうしたの、シルウィオ？」

「誰の子だ。お前はなにを言っている」

「え？」

予想外の答えに、思わず息が止まったと同時に、違和感の正体を知った。

いつも私を見ては自然と微笑む彼が、無表情のままこちらを見ている。

その冷たい視線は……かつてを思い出すかのような鋭さを秘めていた。

「あ……あの……」

「……」

「シルウィオ……オ？」

「……来い」

冷たい無表情のまま、シルウィオは自分の隣の椅子を引く。

まるで、そこに座れというように。

その態度と声色に……ほのかに覚えていた違和感が、懐かしさへと変わった。

「せっかく来たんだ。隣にいる……話ぐらいできる時間はある」

ぶっきらぼうで、怖いぐらい鋭い視線。

しかし無表情の中にある、微かな柔らかな雰囲気と態度。

これって……まさか。

「……なにを見ている。カーティア、座れ」

いつもの愛称ではなく、懐かしい呼び方。

もしかしてだけど、これって……記憶が……私と会った頃に戻っている？

後にリルレットから聞くことになる魔法の効果——それは一時的に、初めて人に好意を抱いた頃の記憶に戻すものだった。

でもそんな事を知らない私は、困惑しつつシルウィオの額を触ってしまう。

「シ……シルウィオ？ 今……なんて？ 熱でもある？」

「おい、なにをしている……いいから、隣に来いと言っている」

「あ……うん」

なんだか、彼と少し仲良くなり始めた頃のような距離感に緊張してしまう。

おずおずと頷くと、額に触れていた手を引かれて、椅子へと座らされる。

「庭園を離れて城内を一人でうろつくな。しばらくここにいろ」

「シルウィオ……私、今は」

「……黙れ。ここでいいだろう」

やはり、出会った頃の彼のようにだ。

疑問の言葉を続けようとしたけれど、シルウィオは無言のまま執務へと戻ってしまう。

「……」

「……」

まずい、なぜか私のほうが緊張してしまう。

この冷たさ、私がお飾りの皇后だからと好き勝手にしていた頃に戻ったようだ。

「……子供の絵が……俺の執務机に入っていた。なぜか知っているか」

「え？」

そう呟くシルウィオの手元へ視線を向けると、執務机の引き出しが開いていた。

中に置かれていたのは……リルレットやテアが描いていた大量のお絵かきだ。

記憶がなくなる前の彼がここで大事に保管していたのだろう。

本来捨てるはずだった紙束を、彼がたまにどこかに持って行っていたのは見ていた。

ま、まさかこんな所に隠していたなんて！

普段のシルウィオが隠していた事実を思わぬ形で知ってしまった……自然とニヤける。

「なんだ。この絵は」

「ふ。ふふ……それは」

「捨て……いや。いい」

記憶がなくなるとも、精神の奥深くでは大事にしていた想いが残っているのだろうか。

捨てると言い出しそうだった口を閉じ、なにも見なかったように彼は引き出しを閉じた。

そして、ペンでも探しているのか、別の引き出しを開ける。そこからゴロゴロと出てきたのは、

大量のどんぐりや石、押し花等だった。

幼かったリルレットが渡していた贈り物だろう。テアからの物も混ざっている。

二人からの小さな贈り物も、捨てずに机に入れていたのね。

私はなんだか嬉しくなって、思わず笑ってしまう。

「……おい、これはなんだ。誰が……おい、なにを笑っている」

流石に無表情を崩し、困惑している彼に、記憶を失っていると伝えるべきか迷う。

だが先ほどのリルレットは、この状況にまったく焦っていないかった。あの楽しそうな口ぶりから察するに、きっと記憶を戻す方法も確立しているのだろう。

ならば、下手に話して混乱させない方が良いのではないか？

決して、久々にぶつきらばうなシルウィオと話す事に興味が惹かれたとかではない。

「シルウィオ、今日はゆつくり二人で過ごしませんか？」

とりあえず、記憶が戻るまでは執務をさせず、休ませた方がいいだろう。

今のシルウィオが城内を一人でうろついたら、皆がパニックになってしまう。

「休めというのか？」

「二人でお話がしたいの、お願い」

「……分かった」

私が目を見てお願いをすると、彼は目線を逸らしながらも頷いた。

こんな仕事や優しさも記憶通りで、懐かしさで胸が高鳴る。

「……お前、今日は予定がないのか？」

「はい。暇なので一緒にいられますよ」

「……な……なら……いや、いい」

シルウィオはなにかを言いかけて、そっぽをむく。

見覚えのある姿が微笑ましくて、私はそつと彼の手を握った。

「シルウィオ。なんですか、言ってください」

「……」

「黙らないで、言つて」

「ひ、暇なら……二人で、どこか出かけ……るか？」

ああ、こんな顔……してたんだ。

シルウィオは目線を逸らしながら、ほのかに頬を火照^{ほて}らせて要求を伝えてくる。
好きになった今だからこそじっくりと見られて、少し嬉しい。
「うん、行こうか。シルウィオ」
「っ……ああ」

今度は嬉しそうだ。無表情だけど、それだけは昔から分かる。

出かけるために用意をしようと思っていた時、コンコンと執務室の扉がノックされ、護衛騎士のグレインが入ってきた。

「陛下、報告書を届けに……つと、申し訳ありません。お寛ぎ中のところ……」

「……グレイン……お前……ノックができたのか」

「へ？ 陛下？」

驚くグレインの反応に、シルウィオも同様に驚いているように見えた。

彼の記憶はまだグレインがノックせずに入ってくる頃のままだ。

笑ってしまいそうになりながら、私は話がこじれぬようにシルウィオの手を引いた。

「シ、シルウィオ。早く行きましょう！」

「……？ ああ」

そのまま歩き出すと、嬉しそうな彼はそれ以上にも言わずに大人しく着いてきた。

その後、シルウィオが準備をしている間にジェラルド様にも事情を話した。

庭にいるリレットに改めて話を聞くと、やはり時間が経てば記憶は戻るらしい。

どうにも知りたい事があつて作った魔法らしいけど、勝手に危険な魔法を作って使った事を怒る必要はありそうだ。

しかし、それは魔法の効果が切れてからの話だ。今はシルウイオの記憶が混濁しないよう、現在の事は明かさないう方がいいと全員の意見が一致した。下手に記憶が混ざっても彼が混乱するだけだろう。

テアたちはグレインやジェラルド様に面倒を見てもらい、私はシルウイオが望むままに帝都へ向かう準備を終えて待ち合わせの場所に向かう。

外行きの服に着替え、外套を着込んでフードを被ったシルウイオの元へ辿り着いた。

「待たせましたか？」

「待ってない、行くぞ」

隣を歩き始めると、私の指と彼の指がふわりと触れた。

彼の手が戸惑うように右往左往しているのを見て、私は笑いながらその指を絡めた。

「……………」

「夫婦ですから、いいですよね？」

「……………うだな」

頬を赤く照らせ、緊張を見せつつも嬉しそうなシルウイオの様子に胸がうずく。

どうしてか…………彼の初々しい反応が嬉しい。

もつと、いろんな反応が見てみたい。そんないたずら心が芽生えてしまう。

恋心を知り始めた頃の彼と、それを知る私。

新鮮な気持ちで、私たちは帝都へと赴いた。

しかし…………一つ失敗があつた。

それはシルウイオだけでなく私も変装をすべきだった事だ。

「おい、見る」

「なんだよ…………あの美人」

私は二児の母であり、今さらそんな目で見られるとは思っていなかったのに、周囲の視線が集まってしまう。

私は皇后として名は知られているけど、顔まで知っている民は多くない。

今まで帝都に出る時は、護衛騎士の方々が人払いをしてくれていたのだろう。

でも今回は、以前よりも気安く接するようになった護衛騎士の態度から、シルウイオに余計な記憶の混乱が起らないように、遠くにいるように伝えていた。

この指示が失敗だったのだ。

野次馬がさらに人を呼び、歩く先々で多くの視線が刺さってくる。

「……………」

私はギュッとシルウイオの手を握って、私たちが夫婦である事を周囲に知らせる。

それでも人が集まってきたてしまうが、フードの下から覗くシルウィオの鋭い視線を警戒してか、流石に声をかけてくる者はいない……はずだったのに……

「お姉さん、今時間ある？」

「ちよつとお話でもしてくれない？」

ニヤニヤと笑いを浮かべた数人の男たちが、私の前に立って道を塞ぐ。

シルウィオの手を握っているのに、彼に視線さえ向けないのは少し不愉快だった。

「今、夫と歩いておりますので……時間はありません」

「いやいや、それにしたって無言じゃ楽しくないだろ？」

「俺たちはただ、あんたがその男に無理やり連れられてるんじゃないかと心配してな」

私とシルウィオは無言でも充分に楽しんでいる。

「必要ありません。本当に夫とは問題なく仲がいいので」

「ちよつと待ちなつて。こんな時にも無言のままの夫なんて嫌だろ？」

こういう人たちは、どうして総じて強引なのだろうか。妙な自信に溢れている。

気付けば後ろにも立たれていて、男の一人が私の肩に手を伸ばしてきていた。

「あの、本当に止めた方がいいわよ」

「そう言わずにさ、困った事があれば相談にのるか——あ、あぐっ！」

「やめろ……」

私の肩に手を回そうとした男の手が、シルウィオに掴まれた。

ああ、こうなればもう止められはしない。

「あ？ なに、なんか文句でもあるの？」

「……」

「なんとか、言えよ」

「あんたもさ、こんな男と一緒にじゃなくて俺たちと一緒に来なよ」

「最後の警告よ。私たちに近づくかないでください」

私の制止の声にも耳を傾けず、男たちはさらに距離を詰めてくる。

その時、男たちの伸ばした手がぐると、あり得ぬ方向に回転した。

「……あ？」

バキリと、砕けた音が響いたと同時に……シルウィオの手が一人の男の顔を掴んで、地面へ叩きつけた。

鼻血を流して倒れ伏した一人を私が確認した瞬間には、囲んでいた他の男たちもいつの間に殴られたのか、地面に沈んでいた。

目にも見えぬ速さで、ほとんどの男を伸ばしてしまったのだ。

シルウィオは無表情のまま、腕が折れて痛がっている男を見つめた。

「い……いでえ！ お前！ な、なにしたか分かってるのか！ 俺は伯爵家の当主様とも取引する商家の者だぞ！ こんな事をして……どうなるか分からせてやろうか！」

伯爵家との繋がりが、私たちに強く出ている理由だったのだろう。

最後は脅しても……なんて考えもあったのかもしれない。
だけど……そんな事を聞くシルウィオではなかった。

「……黙れ」

「へ……？」

外套のフードが外され、シルウィオの銀の髪が太陽に輝く。

周囲の視線が一気に私から、彼に向けられた。この帝都で彼の顔を知らぬ者はいない。
当代皇帝シルウィオの姿に、皆が哑然とした。

「あ……嘘だ……そんな……あつ」

あまりの衝撃のせい、男は驚きと恐怖に染まった表情で泡を吹く。そして他の男たち同様に
ひっくり返って気絶した。

「……こ、皇帝？」

「まさか、隣におられるのは……」

突然現れた皇帝に騒めく周囲の気にもせず、シルウィオは私へと外套を被せた。

「シルウィオ……」

「苛立つ。ここは」

「え？」

外套を被せた私を横抱きにして、彼は大通りから外れて人気のない路地へと歩いていく。
こちらをチラチラと見てくる周囲の人々も、シルウィオがひと睨みすれば皆萎縮して、誰も私た

ちを追う事はない。

そのまま、人がいない路地で降ろされた。

「ありがとう、シルウィオ……っ!!」

ドンツと彼は壁へと勢いよく手を突いて、私の前に立つ。

その視線は、鋭かった。

「苛立つ。先ほどから……ずっと……」

「ど、どうしたの？」

「お前が他の男に見られるのも、その声を聞かれるのも……耐えられない程に苛立つ。誰かが……
お前に触れる事が許せない。なんだ……これは」

彼の激しい反応と、苦悩の言葉のおかげで腑に落ちた。

記憶を失っても彼が子供たちの宝物を捨てられないように、今まで培^{つちか}ってきた想いが消える魔法
ではないのだ。

つまり、彼は今——彼自身にも覚えのない膨らんだ恋情を抱えているのだと……その切ない瞳を
見て分かった。

「辛いよね、ごめんねシルウィオ」

「カーティア……お前は、なにか知っているのか」

「シルウィオ……隠してごめん」

下手に隠して彼が辛くなるのなら、せめて……私の気持ちだけでも知ってもらえば、楽になるか

もしれない。

そう思い……私は背伸びして、シルウィオの首へと手を回し、まだ自分の恋情に完全に気付いてはいない彼へと、口付けた。

唇を離すと、シルウィオは放心している。

私は彼の耳元に顔を寄せ、小さな声で囁いた。

「今ね、貴方の記憶は……過去に戻ってるの」

「過去……だと？」

「忘れてるだけで、今の私たちはこうして想い合う関係なんだよ」

彼の背に腕を回して胸に顔をうずめれば、大きな鼓動の音が鳴り響いていた。

「カーティア……」

「今の貴方はね、私の事をカティと呼んでくれるの」

「……カティ」

シルウィオが、私の背中におずおずと腕を回す。

彼の声色は喜色を含んでおり、私が顔を上げると、無表情の中に嬉しそうな感情が見えた。

「……本当か？」

「私、ウソつきませんから」

笑って答えれば、彼は微笑みを見せながら、たどたどしく私を抱きしめた。

その後、結局私は、彼が忘れている記憶について話す事にした。

内緒にすると決めていたけど、こうなれば話した方がいいはずだ。

実際、思ったよりも混乱していないようだ。

それに、事実を知っていくたびに、私の話に関する記憶が蘇^{よみがえ}ってきて、納得できるらしい。

だから私は記憶をなぞるようにいろんな話をした。

「それでね。私たちでグラナートに一気に攻め込んでいつてね……」

グラナートで起きた事件の顛末だった。

「前宰相のヴォーレンが色々と画策していたのを止めたの」

今までの記憶を思い出すように、懐かしい全てを話す。

「グレインはノックもできるようになったし、ダルテリオ伯の爵位も貰ったのよ」

私たちを取り巻く人々の話だった。

「ジェラルド様は二人の娘さんを連れてきてくれたわ」

そして……

「私たちにね……娘と、息子が生まれてきてくれたの」

私がシルウィオの手を握って呟くと、彼はぎゅっと力を込めて握り返しながら、問いかけた。

「今の俺は……子供たちに……怖がられてはいないか？ 父になれているか？」

初夜の前にも漏らしていた、彼の憂慮^{うれ}していた本音だ。

その問いに……私は笑って首を横に振る。

「もちろん、貴方は子供たちを愛している立派なお父さんよ。お絵かきを大事にしていたのを見たでしょう？」

「あれか……」

「そう。それに、贈り物の数々も……娘のリルレットや、息子のテアが貴方にお礼をしたくて集めていた物ばかりなの。二人とも怖がっているどころか、貴方の事が大好きですよ」

「そうか……そうだったのか」

嬉しそうに、彼は私の手をなぞるようにしてから握りしめる。そしてしばらく無言になり、瞳を閉じた。

「恐らく、記憶はもう戻る」

「っ」

「記憶が戻る感覚がある。あと少しだろう」

「シルウィオ……」

寂しくないと言えば、嘘になるかもしれない。

久しぶりに会った懐かしい彼と話す事で、過去に戻ったような感覚が芽生えていたから。

「……伝えたい事がある」

「っ……」

「俺はカティのおかげで……明日を楽しみにできるようになった。感謝している」
呟きと同時に、首元に回された手に引かれて口付けをする。

漏れた息と共に影が離れて、彼の顔を見つめれば……

「シルウィオ」

「…………カティ、心配をかけた」

頬を少し緩め、私の頭を撫でてくるシルウィオの姿に……思わず笑いながら頷く。

その表情はもう、いつも通りの彼だったから。

「おかえり。帰ろうか、シルウィオ」

「ああ」

二人で歩き出すと、彼は迷いもなく私の手を握ってくれる。さっきは指が触れただけで、あんなに戸惑っていたのに。

そんな彼の行為が……やはり私は一番嬉しく思えた。

「ところで、こっそり保管していたお絵かきの紙は後でしっかり見せてね」

「……忘れろ」

隠していたシルウィオの秘密について言及したら、彼は初めて記憶を失っていた事を後悔するよ
うに、耳元を赤くしていた。握っていた手が熱くなるほどに……

「でも……シルウィオだけが秘密を明かしてくれたから、私からも一つ報告があるの」

「報告？」

「本当は安定期に入ってから言うつもりだったけど……あの子たちに兄弟が増えるの」
お腹を撫でながら呟いたのは、いつ言うべきか迷っていた内容だった。

それを告げたシルウィオは目を丸くしながらも、すぐに私を抱きしめた。

「本当か？」

「うん、三人目の私たちの家族が来てくれたよ」

「カティ……ありがとう。カティはいつも俺に幸せだけをくれる」

「それは私の台詞だよ。ありがとう、シルウィオ」

抱きしめ合いながら、第三子妊娠を互いに喜び合う。

記憶を無くすという事態も、結果として報告の良いタイミングになったかもしれない。

互いの恋心と、愛情を改めて認識した日となったから。

さて庭園へと戻れば、私の愛し子たちをジェラルド様やグレインが見てくれていた。

「あ！ おとうさまとおかあさま、かえってきたよ！」

テアが真っ先に気付き、私たちの元へ駆け寄ってくる。

シルウィオがテアを抱きしめると、我が子は嬉しそうに笑った。

「ぐーうにね、剣の持ち方もおしえてもらえたよ！」

「テア様は、陛下をお守りしたい、と木剣の練習を始めておられるのです。とても筋が良いですよ」

「ぐーう！ ないしょ！」

「っ！ す、すみません……テア様！」

二人のやりとりには笑っていたら、シルウィオも頬を緩めてテアの頭を撫でた。

その時、リルレットも遅れて走ってきた。

「お、お父様……私の事、分かる？」

「ああ、もちろんだ。リルレット」

シルウィオが頷くと、娘は喜びの表情を浮かべながらも頭を下げた。

「お父様、許可されたからって効果も言わずに試して……ごめんなさい……」

ジェラルド様が先にしっかりと言い聞かせてくれていたのだろう。

危険だった事を理解したリルレットが、謝罪の言葉を口にした。

「リルレット様もよく分かってきています。どうか姫様を許してあげてください」

付き添って頭を下げるジェラルド様は、リルレットを気にかけてくれている。

「ジェラルド、頭を上げろ。リルもだ」

「っ」

「俺は怒ってない。……懐かしい経験もできた。感謝している」

「お父様……ごめんね。大好き……」

「ああ、俺もだ」

リルレットの頭を撫でながら、シルウィオは視線をジェラルド様たちに向けた。

「ジェラルド、グレイン。心配をかけたな」

「いえ！ お記憶が戻って嬉しく思います！」

今や、シルウィオの周りには家族や信頼できる人がいる。

改めて昔の彼と話したから、彼が変わったのがよく分かる。

視線は柔らかくなり、冷たい雰囲気からも暖かさを感じるようになった。

「シルウィオ、久しぶりに皆で食事でもしましょうか」

「……ああ、そうだな」

彼の手を握り、私は家族たちや信頼できる皆と共に歩き出す。

もう……孤独で冷酷な皇帝はいない。隣を歩くのは家族を愛するシルウィオだ。

「ところで、リルレットはどうして……あんな魔法を作ったの？」

いち段落したからこそ、私は思わず問いかけた。しかし、リルレットは首を横に振った。

「ないしよにしたいの」

「教えてくれないの？」

なぜか、いつもはハッキリ答える娘が教えてくれない。

その事に疑問を抱いた時、シルウィオの腕に抱かれていたテアが声を上げた。

「テア、しってるよ！ 姉様はシュルクさんに恋？ したから魔法を作って、おかさまたちの恋を

知りたかったって！ さっきテアに教えてくれたよ！」

途端、和やかな雰囲気^{きず}が凍りついたような感覚を覚えた。

穏やかに笑っていたシルウィオの表情が、無表情に戻ったように見える。

前言撤回だ、冷酷でなくなったのは家族に対してのみだけだ。

「言わないでって言ったのに！ テア！」

リルレットが頬を赤くしたので、テアの言葉の真実味が増していく。

シルウィオの反応に冷や冷やしたが……意外にも彼は優しい顔で娘の頭を撫でた。

「別に隠す事はない。そうやって誰かに想いを抱くのは悪い事じゃない」

「お父様……」

「だが、これからはまず俺に言うようにな」

「うん。わかった。ごめんね、お父様……」

幼い歳の子供が、年上の異性に恋情に似た憧れを持つのはよくある事だ。

それは彼も分かったようで、一瞬見えた無表情も、きつと私の気のせいに違いない。

けど当然ながら、それが杞憂^{きゆう}に終わるはずがなかった。

『カルセイン王国シュルク殿下、至急アイゼン帝国に来られたし』

そんな書簡をシルウィオが送ったと聞いたのは、十日後の出来事だった。

こんな内容が急に届くなど、カルセイン王国がパニックになったのは想像できる。

「ジェラルド、あいつの到着までどれほどかかる？」

「はっ!! 本日中には……」

「カティには知らせるな。俺だけで話す」

「はっ!!」

「……奴とリルとの関係は……俺が正す必要がある」

そんな会話が執務室の中で繰り返されているのを、グレインと共に扉に耳を当てて聞く。震えるような威圧感が外にまで届いており、シルウィオが怒っているのを感じる。

「ど、どうしましょうか。カーティア様」

流石に一触即発の国際情勢になりかねないという事で、グレインが今回の書簡について教えてくれたのだ。

そういう彼も、実はジェラルド様からの命令で動いている。

つまりこれは、私とジェラルド様、グレイン、いつもの三人でシルウィオがもし国難を招くような暴走をすれば止めねばならない事態ということ。

まさに国家の一大事レベルの任務でもある。

「と、とりあえずシルク殿下は今日にはいらつしやるのよね？」

「は、はい！ そのようです」

頭を抱えつつも、シルウィオの行動に備えて私たちはできる対策を練った。

太陽が真上に上がり、光が庭園に最も差し込む時間、ついにシルク殿下が来訪した。

「お久しぶりです。シルウィオ陛下、それにカーティア皇后」

シルク殿下はいつもの笑みを浮かべており、そこに困惑は無さそうだった。

以前に会った時は時間を戻した影響により、かなり身体が衰弱していたが、今は歩けるまでには回復したようだ。

「驚いただろう？ 今も危うい状況ではあるけど、リルレット姫の治療魔法のおかげもあってだい

ぶ元の身体に戻っているよ。本当に……あの子は天才だね」

シルク殿下はコロコロと笑っており、シルウィオの前でも態度は変わらない。相変わらず掴めない方だ。

シルウィオは「謁見に來い」とだけ言って、さっさと行ってしまう。

「……」

シルウィオが去ってから、なぜかシルク殿下は黙り込んでしまった。

どうしたのかと思つて様子を窺うと、彼はサツと表情を青ざめさせて私を見つめた。

「カ、カーティア皇后……それで、一つ聞きたいのだけど、シルウィオ陛下って怒ってる？」

ああ、どうやらシルウィオの前では平気な振りをしていただけみたいだ。

話を聞けば、書簡が届いてからカルセイン王家はパニックだったようだ。

かつて対立していたアイゼン帝国とカルセイン王国は、現在は休戦協定が結ばれているとはいえ、決して交友が深い訳ではない。

さらに、考えが読めないシルウィオ直々に呼び出されたとなれば、カルセインは戦々恐々となつたのだろう。

「という訳で、呼ばれた理由が知りたいんだけど……」

「ごめんなさい……シルク殿下」

私は申し訳なく思いつつ、リルレットが彼に子供らしい好意を抱いている事を告げた。

「なるほど……」

「病に伏せているのに、こんな事で呼び出して申し訳ありません！」

「いや！ いいんだ……病人の僕に配慮して、アイゼン帝国からは寝台付きの大型馬車の迎えが来ていたから……あと寝心地も良かったよ」

シュルク殿下はしばらく考えた後、ふっと息を吐いた。

「もしかしてこれは、父親として釘を刺すつもりなのかも？」

「それは……違うかもしれません」

「え？」

シュルク殿下の問いかけに、私は思わず首を横に振った。

「シルウィオも考えなしではありません。貴方を呼び出したのには、きっとそうする必要があると判断したはずですよ」

「……と言いつつ、本当は危惧した通り、シルウィオが親として怒りを感じているだけかも。でも今までの経験から考えれば、彼が直情的な判断をするはずがないとも思えた。

「ご足労に見合う対価を、きっとシルウィオは考えているはずです。だからどうか……ご心配なさらずに彼と会ってください」

私の言葉に、シュルク殿下は一時ぼかんと口を開けて、やがてクスリと笑った。

「あはは、本当にカーティア皇后はシルウィオ陛下の事を信頼しているんだね」

「はい、彼なら大丈夫だと信じています」

「この国で唯一、皇帝陛下を止められる貴方が信じているなら、不安もないか」

私ってそういう認識だったの！

心の中で突っ込んでいると、シュルク殿下は謁見の場へと歩き出す。

「なら僕は、過去に国家間を結ぶために尽力していた君を信じて、シルウィオ陛下と会ってやるよ」

シュルク殿下の態度はいつも通りに戻っており、もう無理はしていなさそうだ。

とはいえ私もシルウィオと彼の話し合いは気になるため、謁見の場に同席する。

「来たか」

待っていたシルウィオの瞳は相変わらず凍てつくようで、その心理は読み取れない。

「シルウィオ陛下、改めて招待を感謝いたします」

「面倒な挨拶はいい。お前には言っておく必要がある。リルとの事についてだ」

開口一番、娘についてという本題に胸がドクンと波打った。

娘に近づくな……なんて言うつもりじゃないよね、シルウィオ。

信じているからこそ静かに見つめていると、彼は静かに言葉を続けた。

「お前に言っておく。リルのために死ぬな」

「……………え？」

「聞こえなかったか？ 死ぬ事は許さん、なにがあってもだ」

私も、シュルク殿下も、予想すらしていなかった言葉だった。

同様に謁見に同席していたグレインも啞然としていたが、ジェラルド様だけがなにやら事情を聞

いていたのか、冷静な顔のまま、分厚い本をいくつも取り出してシュルク殿下に渡す。

「え……あの。これは……？」

「帝国が保有する、医学についてまとめた書物だ。お前にくれてやる」

帝国の医学についてまとめた書物？

それはカルセイン王国における魔法学に匹敵する知識、帝国の知的財産だ。

本来ならば多くの交渉、代替利益との引き換えと共に提供されるべき蔵書である。

それをシルウイオがあつさりと差し出すので、シュルク殿下も珍しく困惑していた。

「し、失礼ながら。どうしてこれを？」

「お前の身は回復に向かつてはいるが、まだ危うい状況に変わりないはずだ」

「そ……それは、そうですが……」

「俺からすればどうでもいいと思っていたが。お前が死ねば、リルが悲しむ」

「え……まさか」

「大切に想う人間を助けられなかった経験は娘の深い傷となる。だからお前が死ぬ事は許さん。技

術も知識も人も提供してやる。帝国の威信にかけ、お前を救うために尽力しよう」

やはりシルウイオは、リルレットが悲しむ結果を避けるために行動していたのだ。

娘のため……家族のため。

「もちろん、リルを嫁にはやらん。俺だけのリルだ」

「そ、それはそうですね……そもそも僕は歳が離れていますし」

「だが、手紙を返すのは誰よりも最優先にしる。リルが喜ぶ」

「は、はい！」

「それと、リルの好物はイチゴだ。カルセイン産の物を送れ」

「も、もちろん！」

「それと、テアの好物のバナナもだ。多めに、テアはいっぱい食べる」

シルウイオからの可愛らしい要望を聞いて、シュルク殿下は思わず笑みをこぼした。

恐怖していたのが間違いであったと気付いたのか、微笑みと共に語りかける。

「どうやら、僕の想像以上に……皇帝は素晴らしい父親になったようですね」

素晴らしい父親と言われて、シルウイオは満更でもなさそうだ。

そんな彼に、謁見中ながらも私とシュルク殿下は目を合わせて微笑んだ。

その後、シュルク殿下を呼び出したのは蔵書を提供する諸々の手続きが必要だったからだとして

ラルド様が説明してくれた。

迅速に提供するためにも、シュルク殿下本人が帝国に来る必要があったようだ。

シルウイオもシュルク殿下の容態を気にしていたのか、急な書簡については詫びていた。

加えて、彼は二国間にとっても魅力的な取引をもたらした。

「現在、立て直しを進めているグラナート王国についてですが。王家不在の状況により辺境にて治安が悪化傾向にあります」

ジェラルド様が報告書を読み上げつつ、ある交渉を持ちかける。

「そこで、アイゼン帝国とカルセイ王国の共同で治安維持のための巡回作戦を行うことを提案いたします。これは二国間の交流の先駆けと考えてくだされば」

「それは、ぜひとも我が国からもお願いしたい事です」

シュルク殿下が驚きと、歓喜の混じった声色で答える。

それもそうだ。長らく交流のなかった二国が、この共同作戦を機に親交を深めていけば、両国の国民も抵抗なく国交を受け入れられるだろう。

さらに両国の中間に位置するグラナート王国を建て直し、貿易路が開通すれば、連鎖的に多大な利益を生み出す。

これほどに大きな利益を持ち帰ったら、シュルク殿下のカルセイ王国での評価は計り知れないほどに上がるだろう。

病をおしてやってきた苦勞に見合う対価、そして未来を見据えたシルウイオの提案だ。

「そうか……聡明なのは当たり前だ。シルウイオ陛下は長く続いていたアイゼン帝国の貴族内乱をたった一代で治めた手腕をお持ちですものね」

シュルク殿下が不意に、そんな呟きを漏らしたのが私には聞こえた。

なんだかシルウイオが褒められた事が嬉しくて、私は頬を緩めながら話し合いを見つめる。

交渉は難航する事なく進み、アイゼン帝国とカルセイ王国での正式な交流が決まった。

書類にサインを終えたシュルク殿下は笑みを浮かべてシルウイオに語りかける。

「此度の提案、心より感謝すると共に、これに見合う対価を必ずご用意します」

「別にいい……元氣になったら、またリルに会いに来い。喜ぶだろう」

「はい。生きて、元氣な姿を見せに来ますね」

「ああ」

謁見の場にて、シュルクは他国の王家としては異例だが……頭を下げて感謝を告げた。

未来のためを思えば、今日ほど恵みのあった日はないと思う。

長く途絶えていた二国間の交流が、娘のリルレットをキツカケに一步進んだのだ。

「カーティア皇后、今日は本当にアイゼン帝国に來られて良かった」

「シュルク殿下……シルウイオと会ってくださり、こちらこそありがとうございます。グラナート

王国にとっても、今日の話し合いはより良い未来に繋がってくれるはずです」

「ああ、きつとそうなる。また君のおかげで時間を戻した事が最良の選択だったと思えたよ」

「私だけでなく、シルウイオや、シュルク殿下のおかげです」

「何度も言っているはずだよ。始まりのキツカケは君だ。……つと、そろそろ帰らないと」

シュルク殿下も忙しい方であり、今夜は宿泊せずにカルセイ王国へ帰還するようだ。

早々に帰りの馬車に乗り込もうとする彼の背に、ふと明るい声がかけられた。

「おししよう！ 本当に来てたんだ！」

その声の主は振り返らずとも分かった。

娘のリルレットが、嬉しそうに私たちの元へ走り寄ってくる。

「やあリルレット姫、僕も会えて嬉しいよ」

久しぶりの再会に、シュルク殿下も心から嬉しそうだ。

二人は挨拶も早々になにかを話し合っているが、内容が魔法分野の専門的な話で、私にはまったく分からない。

「おししよう、身体を治す魔法で提案があつてね……魔力原理を見返して——」

「なるほど、流石だね。でもそれを実行するには第四属性魔法の応用と、混合魔法の——」

ちんぷんかんだが、ひとまず娘のリルレットが嬉しそうで良かった。

しばらく話し込んだら二人も落ち着いたのか、いよいよお別れの時だ。

「おししよう！ 久しぶりに会えて良かった」

「うん、僕も姫様と話すのはいいい刺激になるよ」

二人にとつて良い話し合いができたみたいで、良かった。

さあ、リルレットを抱っこしてシュルク殿下を見送ろう。

「それじゃあ、僕はこれ……でっ!!」

突然、シュルク殿下が口元を押さえた。その瞬間、彼の指の隙間から、真っ赤な血が流れていくのが見えた。

「シュルク殿——っ！」

「大丈夫！ いつもの発作だよ。気にしないで」

「気にしないでと言っても……」

「改善に向かっているから、大丈夫。リルレット姫も安心して……僕は死んだりしない、君のお父

様とも約束をしたからね」

発作の症状と共に、シュルク殿下の呼吸は酷く荒くなっていく。

だけど無理をして笑い、私たちに心配をかけぬように振る舞って彼は馬車に乗った。

「また会おう。必ずね」

「おししよう……」

「大丈夫、リルレット姫……君と僕、それにシルウィオ陛下も協力してくれているんだ。絶対に僕は助かるから」

その言葉と笑顔を信用したいのに、シュルク殿下の顔色は真っ青で、心配が膨らむ。

「……また、会おう」

本当にまた会えるのか。そんな不安をどうしても抱いてしまう。

去っていく馬車を見送っていると、遠ざかっていく馬の蹄うづめの音が不安を煽った。

「お母様……私ね、おししようを助けたいの」

「リルレット……」

「でも、まだ足りない。まだ知識が足りない……悔しい、よ」

あれだけ明るかった娘が瞳に涙を浮かべて、悔しさを吐露する。

私は娘の頭を撫でながら、私自身も自らの無力を痛感した。

シュルク殿下は、かつてヒルダによって混沌とした世界を救うために時間を戻す魔法を行使した。

その代償に寿命を縮める事になると分かっている、行動してくれた。

そんな彼を私たちはいまだに救えていない。彼にだけ犠牲を強いている。どうかして……私が幸せを得たキツカケをくれた彼を救いたい。募る想いと共に、私はリルレットを抱きしめた。

第二章 過去の因縁との向き合い方

シュルク殿下の謁見から、二年と少しが過ぎた。

爽やかな風が頬を撫でる中で、私は庭園で本を読んでいた。

難しい魔法学書だが、少しだけなら分かるようになってきている。

とはいえ目が疲れてきたため、休憩しようと膝の上で眠っているコッコちゃんを撫でる。

「コケ」

「おはよう。コッコちゃん」

私の言葉が合図だったように、コッコちゃんが起き上がった。

そして私が座る椅子の傍に置かれているゆりかごが揺れたので、中にいる子に声をかける。

「起きて……イヴァ」

「あう……」

寝ぼけまなこで目を覚ますお寝坊さんはイヴァ。

私とシルウイオの三人目の子供で、あと数か月で一歳半になる。

シルウイオに似た銀色の髪に、私と同じ黒色の瞳。

可愛い姿はリルレットやテアたちと同じように天使みたいだ。

「おはよう、イヴァ」

「おああ」

まだ眠たそうなイヴァの頭を撫でながら抱っこしてあげたら、また寝てしまった。

リルレットたちは元気な子たちだったけど、イヴァは対照的に大人しい子だ。

シルウイオに似て無口で……あまり感情を表に出さない。

「お母様！」

イヴァをあやしていると、元気な男の子の声が響く。

駆けてきたのは六歳になったテアだ。同じ歳だった頃のリルレット以上に元気いっぱい、片手

には木剣を握っており、額には爽やかな汗を流している。

「テア、剣の稽古は終わったの？」

「うん！ イヴァはまだ寝てる？」

「にーい」

「起きてるね。おはよう、イヴァ！」

あんなに甘えん坊だったテアはもうすっかりお兄ちゃんだ。

顔つきが男の子らしくなってきただけでなく、グレインと剣の稽古を共にできる程に力もあり、